# 参勤交代

「参勤交代」と「鎖国」は徳川幕府の二大祖法であった。両制度ともにその素は初代徳川家康のときからであったが、これが幕府の制度として完成するのは、ともに三代将軍家光の寛永十年(一六三三)代である。

徳川家光を江戸幕府体制(幕藩体制)の完成者というのは次のような理由がある。

参勤交代の参勤というのは、権力者のところに「参上」をして「勤めをする」という意味で、鎌倉時代・室町時代にもなかったわけではない。しかし江戸時代のように権力者(将軍)の居所に屋敷(江戸屋敷)を設けて自分の領国(くに)との間を往来するようになるのは、秀吉のときからである。この豊臣氏に対する諸大名の参勤は、秀吉の死後、徳川家康が奥州の雄・上杉景勝討伐の軍を起こすとき、景勝は豊臣政権(秀頼)に対して、参勤がなく、逆心の風聞がある」ということをその理由としていることから、かなり確立していたとしてよいであろう。

この上杉景勝の討伐は関ヶ原の戦(一六〇〇)に連動、これに勝利した家康はやがて慶長八年(一六〇三)征夷大将軍となり江戸に幕府を開くのだが、まだ大阪に豊臣秀頼がいるため徳川氏に対する全国の大名たちに参勤してもらいたいため、江戸に屋敷地を与え、また参勤してくる大名たちをねぎらうため、東海道には高輪御殿、中山道には白山御殿、奥州街道には小菅御殿を建てた。そして鷹狩りに行くなどと口実を設けて、将軍自らそれを送迎するのが常であった。

品川宿の一番はずれに妙国寺という法華宗の名刹がある。この寺は江戸時代には朱印地十石を持ち、住職は駕籠に乗って江戸城に登城し、将軍に単独で謁見をすることができる、「独礼乗輿」という特権をもっていた。この寺の記録を見ると元名六年(一六二〇)三月十三日から寛永十二年(一六三五)十月二日の間に四十四回の将軍の御成が記されている。秀忠が九回家光が三十五回である、

ところで、この両将軍の妙国寺御成であるが、もちろん同寺に対する崇敬もあるだろうが、「武家諸法度」に参勤交代が義務として明記された寛永十二年を最後に、ピタリと止まっていることから、寺参を表面上の口実として、東海道を参勤してくる大名たちを将軍自らが送迎していた証拠としてよい。

参勤交代を大名たちに義務づけた寛永十二年の武家諸法度には「大名・小名、在と江戸との交替を相定むる所なり。毎歳夏四月中参観致すべし」とある。「在」とは国で、大名たちは自国と江戸とを交代するの時期は毎年の四月(現五月)である。

しかし、これでは単純すぎるというので同十九年には譜代大名は六月か八月が交代期、関東に所領を持つ譜代大名は二月と八月に半年ずつ江戸と在とを交代し、また城持ちの大大名は交互に入れ替わるように組み合わせた。

もっとも特別扱いになった大名もあった。まず御三家のうち尾張・紀州両家は三月を交代期とするが水戸家は江戸常住で参勤せず(定府という)、また老中・若年寄・奉行など幕府の要職についたものも定府であった。このほか蝦夷地(北海道)の松前氏は六年に一回、対馬の宗氏は三年に一回の参勤であり、長崎警備の役をうけもつ福岡の黒田氏(五十二万石)と佐賀の鍋島氏(三十五万石)とは交互に十一月に参府して二月に就封した。

このようにして参勤交代の制度は定着するのであるが、それが修正されるのは約百年ほどたった、八代将軍吉宗の享保年間(一七一六～一三六)のことである。

江戸時代を代表する「元禄の文化」は庶民の繁栄に支えられたものであったが、その裏で領主たちはひどい財政難に泣いていた。なかには財政難のあまり商人たちから借りた金が返せなくて元利ともに踏み倒すものも少なくなかった。これを「お断り」といったが、三井家の三代目三井高房は大名に踏み倒されて破産した四十八家の例をあげて過分な大名貸しをすることを戒めている。幕府とて例外ではなかった。とくに吉宗が紀州家から入って八代将軍になったときは、それが行きつくところまで行ったという状態であった。いわば吉宗は幕府の財政難を建て直すために将軍になったようなものである。吉宗はまず自ら衣服は木綿のみとし食事も一日二食とするなど、倹約にはげむとともに、他にも徹底した倹約を強いた。吉宗の改革は、当然のことであるが参勤交代時の供まわりの人数にも及び享保六年(一七二一)にはその石高に応じて表一のような制限を定めている。これはそれまでのものが多すぎて物いりというので制限した数なのだから、例えば七十二万八千石もの大大名の九州鹿児島の島津氏など、参勤交代の総勢は優に五百人をこしていた。さらに吉宗は翌七年には諸大名から領地高一万石につき百石づつの献米をしてもらうかわりに、大名たちが参勤交代で江戸にいる期間を半年短縮し半年在府・一年半在国という制度に切りかえた。ただし、

この制度は享保十五年（一七三〇）、財政が建て直ったからというので、もとの制度にもどしている。

このようにして参勤交代制はまたもとにもどり、以降幕末まで続くが、安政の開港に伴う社会変動のなか、越前福井藩主松平慶永（春嶽）らの意見具申をいれて、文久二年（一八六二）大名を四組に分け、三年に一度参勤することにした。また在府期間も三家・溜間詰・溜間詰格の大名たちは一年間、大広間詰・譜代大名・外様大名・雁間詰・奏者番・菊間縁頬詰・交代寄合のものたちは百日と短縮した。そして参勤交代制と一体の関係にあった、「大名妻子在府制」も同時に大名の嫡子は在府・在国自由、妻子は帰国、江戸藩邸の武士も、できるだけ国許に帰すことにした。かなり思い切った改革であるが、このあと幕府が続くのは、わずか五年間である。（参勤交代は）国力疲弊の損害は御座候へども、其益はこれなし」とは、安政元年（一八五四）二月、松平慶永がときの老中阿部正弘に参勤交代の緩和を進言した建白書のなかの言葉である。

このように参勤交代は、諸藩の国力を疲弊させるだけの害はあっても益のない制度である、というのが江戸時代以来今日まで続いている一般的な評価だが、はたしてそうであろうか。

周防・長門二ヶ国の領主毛利重就の宝暦二年（一七五二）の参勤を見ると御供の人数五四九人、先行十五人となっている。、計五六四人である。これだけの人数が約三十日ほどの日数をかけて二年に一度の割合で、江戸と毛利藩藩庁のある萩の間を行き来するのだから、そのための出費は大変なものであったろう。参勤交代は大名たち、とくに日本の外周に領国をもっている外様大名に出費を強いて、謀反をおこす力をなくす為に実施したのだ、という説が出るのも無理からぬところである。表二の毛利吉就の参勤日程表を見れば判るように、、海路をとる場合は潮待ち、風待ちということはあっても、原則的には一ヶ所に二泊することなく、朝七時には出発して夕方まで移動するのだから、徒歩の侍はもちろん、駕籠に乗った殿様といえども大変な肉体労働で、その苦労は並大抵のものではなかったろう。

毛利藩の参勤交代の規定（享保十年）によると、毎朝一番拍子木で朝支度をはじめ、二番拍子木でお供揃をし、三番拍子木で出立というルールになっているから、仮に朝七時に出発ということになると、少なくともそれより二時間は早く起きて、いろいろ準備をはじめなくてはならなかった。

そのうえ四月一日は朝、池鯉鮒（知立）を立ち、途中岡崎で昼食をとり、夜は赤坂宿に泊まる予定だったのが、たまたま岡崎で幕府のお金道中にかちあってしまい同所で昼食をとることができなかった。結局その日は昼食抜きで歩いたのか、それとも岡崎以外の所で臨時に食べたのか、そこら当たりは記録にないので判らないが、ともあれ五百人をこえる集団の移動に食べたのか、たとえどこかで食べることができたとしても、大変な騒ぎであったことは疑いない。また有名な大井川の渡河は四月四日午後になっているが、このとき川越人足を二千四百六十五人も使い、一人につき三十二文ずつ支払っている。ともかく参勤は殿様にも家来にもたいへんで、自らも越前福井からの参勤者であった松平慶永が、参勤を「国力疲弊の損害は御座候へども、其益はこれなし」といったのは無理からぬところである。

しかし視野を大きくしてみると参勤交代のプラス面の大きさも見落とすことはできない。それは参勤交代のもつ富・文化・情報の撹拌均等化作用である。

例えば富について考えてみると、江戸時代にはまだ今日のように、中央政府が国民から税金をとり、年金や投資などの形で国民に再配分するという機構はもっていなかった。つまり富を集めた者が、それを使わない限り、それは下々に拡散しなかったのである。この視点から見ると参勤交代は全国に散在する約二百七十の藩が、江戸を行き来する間に、旅費や経費の形でこまかく銭をまいて歩くのだから、富の拡散機能としてはこれにまさるシステムは他に考え及ばないのである。同じことは文化の交流や情報の伝播についてもいえるので、もしこの制度（参勤交代）がなかったら近世約三百年の間に、個々の領主がつくる地域国家（藩）はさらに固定化して、日本の国民国家の形成もまた立ち遅れていただろう。

例えば、江戸が創り出した日本を代表する文化＝浮世絵の発展も参勤交代を抜きにしては語れない。すなわち、参勤交代で江戸へやって来た地方武士たちが、郷里への手土産として、手軽で都会的雰囲気のある浮世絵を買い求めたわけであり、彼らの購買がない限り浮世絵はあそこまで発展することはなかったといえるのである。また江戸時代に盛んに出版された名所案内記も参勤交代で江戸に来た武士たちの需要あってのことであった。

「可愛い子には旅」とか「百聞は一見にしかず」という言葉がある。旅は文化のけん引車である。例えそれがある程度の副作用を伴うにしても、旅は人や文化の交流、経済の活性化に大きな役割を果たす。国家的な旅の制度としての「参勤交代」を、このあたりで見直すべきであろう。

参考文献　大江戸秘話（中央公論社・大石慎三郎著）

表一

| | 馬　上 | 足　軽 | 中間人足 |
|---|---|---|---|
| ２０万石以上 | １５騎～２０騎 | １２３人 | ２５０人～３００人 |
| １０万石 | １０騎 | ８０人 | １４５人 |
| ５万石 | ７騎 | ６０人 | １００人 |
| １万石 | ３，４騎 | ２０人 | ３０人 |

表二

貞享４年（１６８７）毛利藩主吉就の参勤道中

| | | |
|---|---|---|
| 萩 | ３月１１日 | 午前７時ごろ駕籠で出発 |
| 山口 | 〃 | 午後２時ごろ御茶屋着、泊 |
| 山口 | １２日 | 午前７時ごろ出発 |
| 三田尻 | 〃 | 泊 |
| 三田尻 | １３日 | 悪天候のため船中泊 |
| 三田尻 | １４日 | 雨がやんだので午後２時ごろ乗船 |
| 上ノ関 | １５日 | 押船で着、船中泊 |
| 上ノ関 | １６日 | 午前７時ごろ出船、２時ごろ家室着 |
| 亀が首（倉橋島） | 〃 | 午後７時ごろ芸州亀が首着、船中泊 |
| 亀が首 | １７日 | 午前６時すぎ出船 |
| 高崎（弓削島） | 〃 | 午後２時すぎ着 |
| 高崎 | 〃 | 午後４時ごろ潮時がよく、順風だったので出船 |
| 鞍ノ津 | １８日 | 夜を走って午前３時ごろ着、泊 |
| 鞍ノ津 | 〃 | 午前６時ごろ出港 |
| 下津井 | 〃 | 午後２時ごろ入港、潮が悪いため潮待ち、船中泊 |
| 下津井 | １９日 | 潮待ち、船中泊 |
| 下津井 | ２０日 | 昼ごろ出港 |
| 姫路 | 〃 | 午後２時ごろ着、泊 |
| 姫路 | ２１日 | 午前７時ごろ出発 |
| 加古川 | 〃 | 昼食 |
| 明石 | 〃 | 泊 |
| 明石 | ２２日 | 午前７時ごろ出発 |
| 兵庫 | 〃 | 昼食 |
| 尼ケ崎 | 〃 | 乗船 |
| 大坂 | 〃 | 暮時に着、泊 |
| 大坂 | ２３日 | 午後２時すぎ川船で出船、船中泊 |
| 伏見 | ２４日 | 昼ごろ着、泊 |
| 伏見 | ２５日 | 午前２時すぎ駕籠で出発 |
| 京都 | 〃 | 藩邸に入り昼食 |
| 京都 | 〃 | 午後２時すぎ出発 |
| 大津 | 〃 | 午後４時すぎ着、泊 |

| | | |
|---|---|---|
| 大津 | ２６日 | 午前７時ごろ出発 |
| 草津 | 〃 | 昼食 |
| 水口 | 〃 | 泊 |
| 水口 | ２７日 | 午前７時ごろ出発 |
| 坂の下（関） | 〃 | 昼食 |
| 石薬師（鈴鹿） | 〃 | 泊 |
| 石薬師 | ２８日 | 午前６時出発 |
| 桑名 | 〃 | 昼食ののち乗船（七里の渡し） |
| 宮（熱田） | 〃 | 泊 |
| 宮 | ２９日 | 午前７時ごろ出発 |
| 池鯉鮒（知立） | 〃 | 泊 |
| 池鯉鮒 | ４月　１日 | 発 |
| 赤坂（音羽） | 〃 | 泊 |
| 赤坂 | ２日 | 発 |
| 二川（豊川） | 〃 | 昼食 |
| 荒井（新居） | 〃 | 泊 |
| 荒井 | ３日 | 船で出発 |
| 舞坂 | 〃 | 下船 |
| 浜松 | 〃 | 昼食 |
| 袋井 | 〃 | 泊 |
| 袋井 | ４日 | 午前７時ごろ出発 |
| 日坂（掛川） | 〃 | 昼食、大井川を渡る |
| 岡部 | 〃 | 泊 |
| 岡部 | ５日 | 午前７時ごろ出発、安倍川を渡り駿府を通過 |
| 沖津（興津） | ６日 | 泊、午前７時ごろ出発、富士川を渡る |
| 吉原 | 〃 | 泊 |
| 吉原 | ７日 | 発 |
| 三島 | 〃 | 昼食 |
| 箱根 | 〃 | 泊 |
| 箱根 | ８日 | 午前７時ごろ出発 |
| 小田原 | 〃 | 昼食 |
| 大磯 | 〃 | 泊 |
| 大磯 | ９日 | 早朝出発 |
| 戸塚 | 〃 | 昼食 |
| 川崎 | 〃 | 泊 |
| 川崎 | １０日 | 午前４時ごろ出発 |
| 品川 | 〃 | 昼食 |
| 江戸 | 〃 | 江戸屋敷に到着 |